

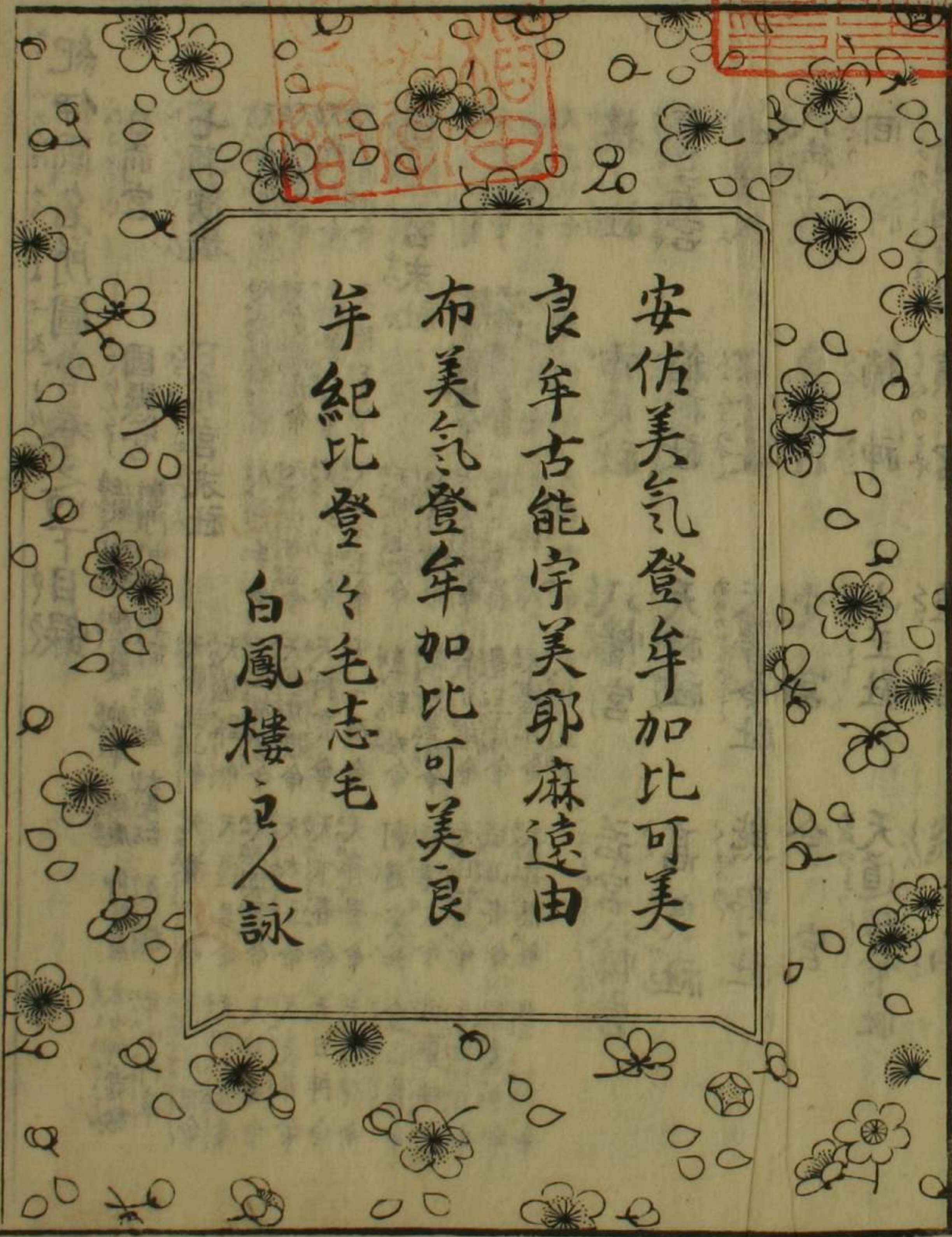
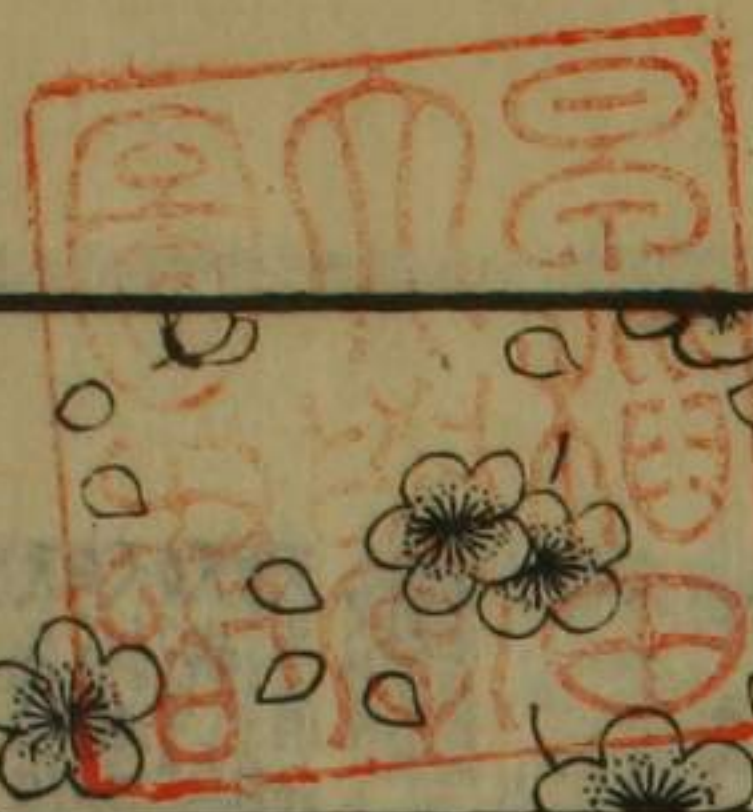
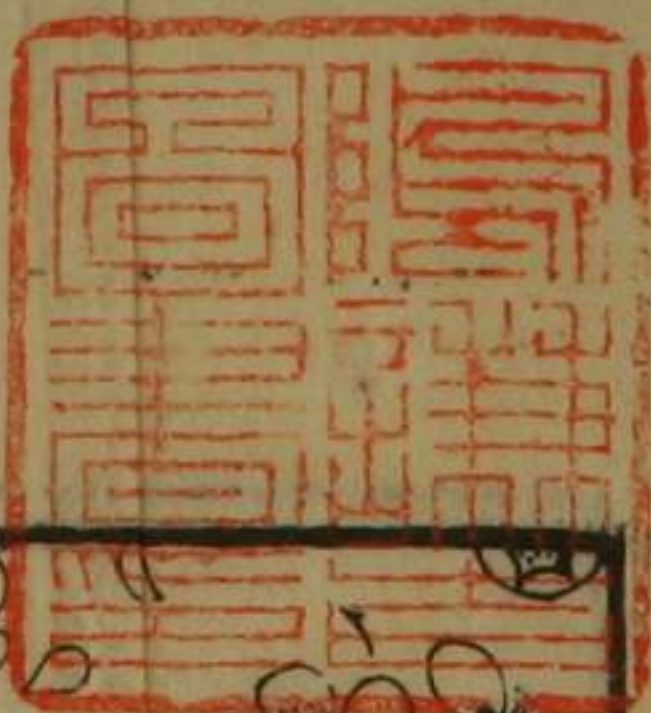
紀伊國名所圖會

四之卷下
名草郡

JL 4
325
7

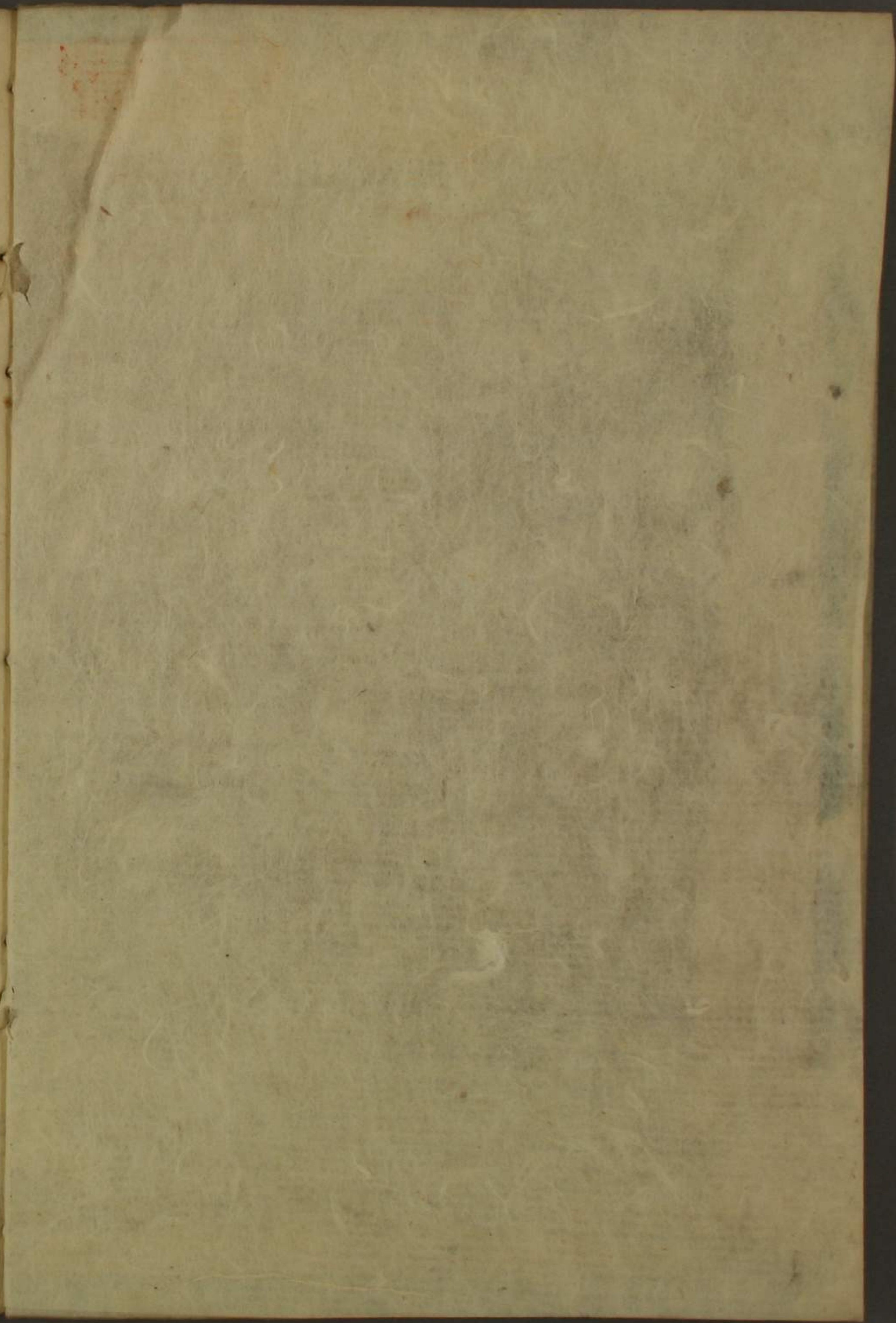


呂門
325
卷7



安仿美氣登年加比可美
良年古能守美耶麻遠由
布美氣登年加比可美良
年紀比登々毛志毛

白鳳樓主人詠



紀伊國名所圖會卷之四下目錄

日前宮

七瀬榎枝

國縣宮末社

市夷社

狹荷社

深草社

專女社

楠神

天首箇命社

國縣宮

日前宮末社

市夷社

狹荷社

深草社

專女社

楠神

天首箇命社

八幡宮

天神社

穴宮

山王社

草宮

飛山

若宮八幡宮

高良社

熊野社

今宮

天道根命社

飛山

神畔

麻鳥比賣神社

忌部里神社

鳴武神社

香都知神社

岡崎御

岡崎御坊

須佐神社

伊太祁曾神社

妻河前社

辨財天祠

白山権現

天宮

紀伊國造殿館

古社人職名

天満宮

大長坐持神社

鳴神社

廢光德寺

生魚石

都麻津比賣社

奈久智王子

平尾王子

丹生神社

足守神

國造家曆代

古社役人

藥德寺

直水谷

撰社

堅真音神社

満願寺

日限寺

普門寺

末社

觀音寺

足守神

溝の内

大日堂

鎮守社

音浦樋

ちかこの例

鎮守祠

鎮守祠

鎮守祠

鎮守祠

鎮守祠

鎮守祠

鎮守祠

鎮守祠

鎮守祠

鎮守祠

鎮守祠

鎮守祠

鎮守祠

宝光寺

大師堂 鎮守所

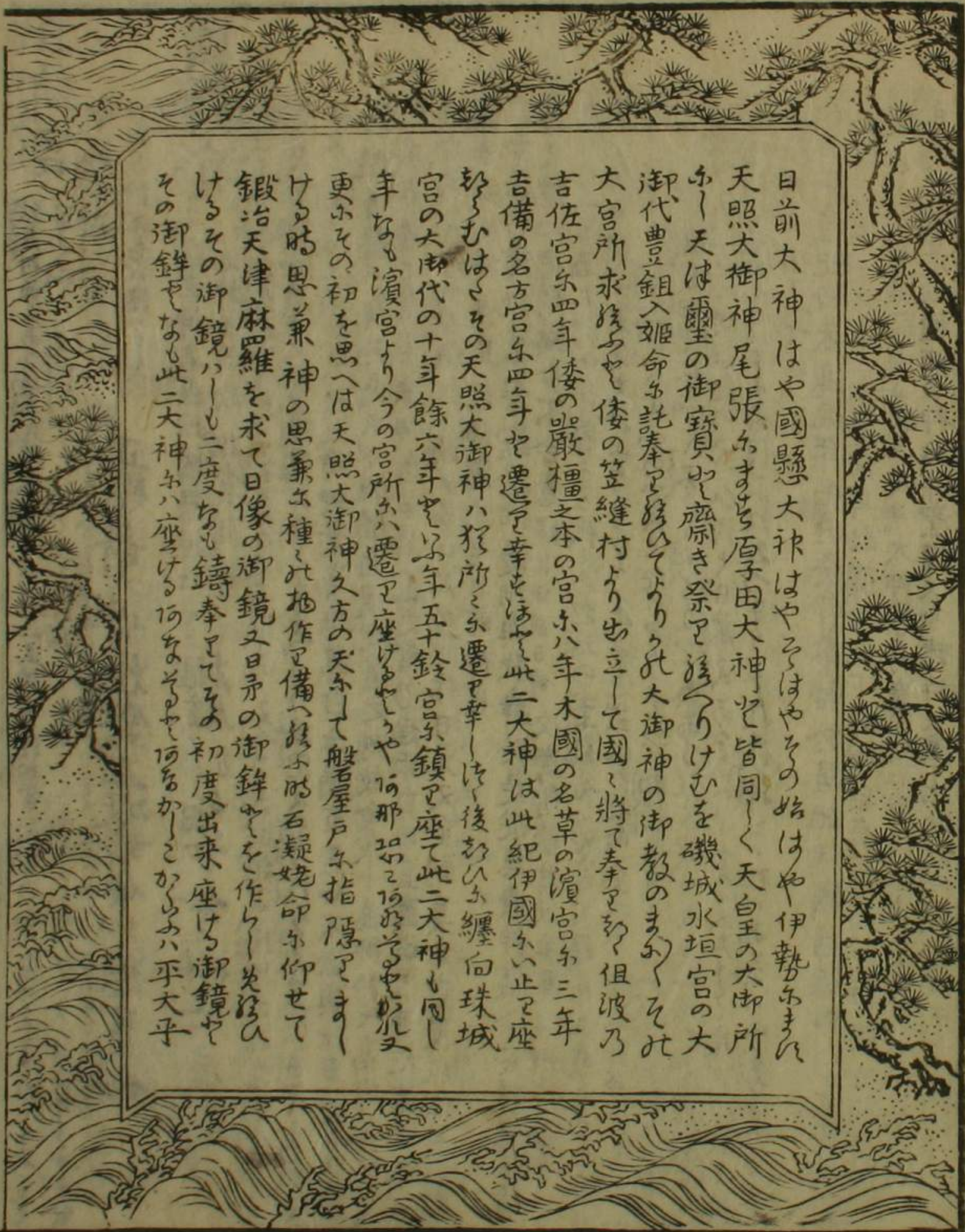
最初之拳

願成寺

観音寺

西光寺

日前大神はや國懸大神はやその始はや伊勢の
 天照大神尾張のまら子田大神也皆同く天白王の大神所
 かし天は爾の御寶也祇園祭に注りけむを磯城水垣宮の大
 御代豊鉏入姫命を託奉り給ひてより此大神の御教のまのく
 大宮所求給ひや倭の笠縫村より出立て國に將て奉り給ひ但波乃
 吉佐宮の四年倭の嚴福之本の宮の八年木國の名草の濱宮の三年
 吉備の名方宮の四年遷り幸をばや此大神は此紀伊國の止り座
 移りむはそこの天照大神の所より遷り幸し後むは纏向珠城
 宮の大御代の十年餘六年より年五十鈴宮の鎮座此大神も同し
 年にも濱宮より今の宮所へ遷り座けりや何那那の所よりや
 更ふその初を思へは天照大神の天方にて船屋戸の指隠り
 ける時思兼神の思兼の種に地作備へ給ひ給ふ時石凝姥命を仰せて
 鍛冶天津麻羅を求て日像の御鏡又日矛の御鉾を作り給ひ
 けるその御鏡は二度にも鑄奉りてその初度出来座ける御鏡や
 その御鉾や此二大神の座ける所をそや何那那の所かこかみ平大平



日前宮

伏見村西あり延喜式神名帳日前神社名神大月次相嘗新嘗○ひのくまのえもなまきつるど
今世は信じてゐるが、いふたのふたつは、いふたのふたつは、いふたのふたつは、いふたのふたつは、
正殿日前神。相殿左石凝姥命。右思兼命。

國懸宮

日上神名帳曰國懸神社

相殿左 細女命 右 玉屋命

○日本書紀曰朱鳥元年七月癸卯奉幣於居紀伊國國懸神○文德實錄曰
嘉祥三年十月甲子遣左馬助從五位下紀朝臣貞守向紀伊國日前國懸天神
策命云天皇我詔旨止掛毛畏幾大神等乃廣前仁申給倍申久先允神財奉進在村
申賜此故是以種種乃神財乎潔備天令棒持天奉出此狀乎聞食天天皇朝廷乎常磐
○古語拾遺曰上畧舉庭燎俳優相與歌舞於是從思兼神議令石凝姥神鑄日
像之鏡初度所鑄少不合意神紀伊國日前次度所鑄其狀美麗是神也下畧
也故即以石凝姥為治工採天香山之金以作日牙又全剥真名鹿皮以作天羽鞞用
此奉造之神是則紀伊國所坐日前神也
○日本書紀曰朱鳥元年七月癸卯奉幣於居紀伊國國懸神○文德實錄曰
嘉祥三年十月甲子遣左馬助從五位下紀朝臣貞守向紀伊國日前國懸天神
策命云天皇我詔旨止掛毛畏幾大神等乃廣前仁申給倍申久先允神財奉進在村
申賜此故是以種種乃神財乎潔備天令棒持天奉出此狀乎聞食天天皇朝廷乎常磐
○古語拾遺曰上畧舉庭燎俳優相與歌舞於是從思兼神議令石凝姥神鑄日
像之鏡初度所鑄少不合意神紀伊國日前次度所鑄其狀美麗是神也下畧
也故即以石凝姥為治工採天香山之金以作日牙又全剥真名鹿皮以作天羽鞞用
此奉造之神是則紀伊國所坐日前神也

堅磐仁護幸奉賜比天下平安尔矜賜比助賜怖恐美忍穰申給岐久申云々○同書曰
貞觀元年七月十四日散位從五位下紀朝臣宗守為日前國懸兩社使○今集解仲
冬上外相嘗祭註曰紀伊坐日前國懸伊太祁曾鳴神以上神主等請受官帛祭
○延喜式曰日前社一座絹四足絲三納四銖綿八屯五兩調布六端八尺木綿二竹八
兩酒縮百束又臨時名神祭部曰日前神社國懸神社云々○公卿補任曰高倉院兼
安三年七月七日藤原範光任紀伊守安元二年十二月八日遷任下野守日前國懸社造
立之間依祖母之服改任之 ○中右記曰寬治五年十二月七日今日上卿參陣擇
申日前國懸社造官日時○東鑑曰嘉復四年六月九日紀伊國日前宮營作事付成功
而可造畢之旨依被宣下將軍家所令舉申之任人等于今不進其功之間有社司
之訴仍無未濟可致沙汰由被仰下云々○和名按曰國懸神戶日前神戶

風雅集

神紀伊 紀 俊 文

家集

紀 俊 長 文

家集

紀 行 文

△日前宮(奉) 撰集の哥又近代堂主奉納の詩歌を以て思
近江國邦安社(奉) 撰集の哥又近代堂主奉納の詩歌を以て思
一條右府忠良公
轉法輪大納言公修卿
飛鳥井大納言雅威卿
太政大臣大納言經久卿
菊亭大納言尚季卿
久世前大納言通根卿
平松前中納言時章卿

宮居る神のまゝに國をく兼んずるなりあゝ

此神のまゝに國をく兼んずるなりあゝ

紀の海やまゝに流るる水は國をく兼んずるなりあゝ

日本大御神と称し奉る神聖代の神

奉る神聖代の日矛にまゝて共天照大御神の前雪にま

まはるり候邪那波命修邪那美命に終妻之誓したる

遂に坐坐乃橋の小門に被被たりて終る成る

神三柱まゝと其初と天照大御神次を月讀命次を建速

須佐之男命と称し奉る神聖代の神

所をく兼んずるなりあゝ

海原に所をく兼んずるなりあゝ

男命の所をく兼んずるなりあゝ

海も涸るてて無神もてて無神もてて無神もてて無神も

池尻宰相暉房卿

飛鳥井左兵衛督雅光卿

鷲尾中将隆純朝臣

野宮少將定許朝臣

宮居る神のまゝに國をく兼んずるなりあゝ
此神のまゝに國をく兼んずるなりあゝ
紀の海やまゝに流るる水は國をく兼んずるなりあゝ
日本大御神と称し奉る神聖代の神
奉る神聖代の日矛にまゝて共天照大御神の前雪にま
まはるり候邪那波命修邪那美命に終妻之誓したる
遂に坐坐乃橋の小門に被被たりて終る成る
神三柱まゝと其初と天照大御神次を月讀命次を建速
須佐之男命と称し奉る神聖代の神
所をく兼んずるなりあゝ
海原に所をく兼んずるなりあゝ
男命の所をく兼んずるなりあゝ
海も涸るてて無神もてて無神もてて無神もてて無神も

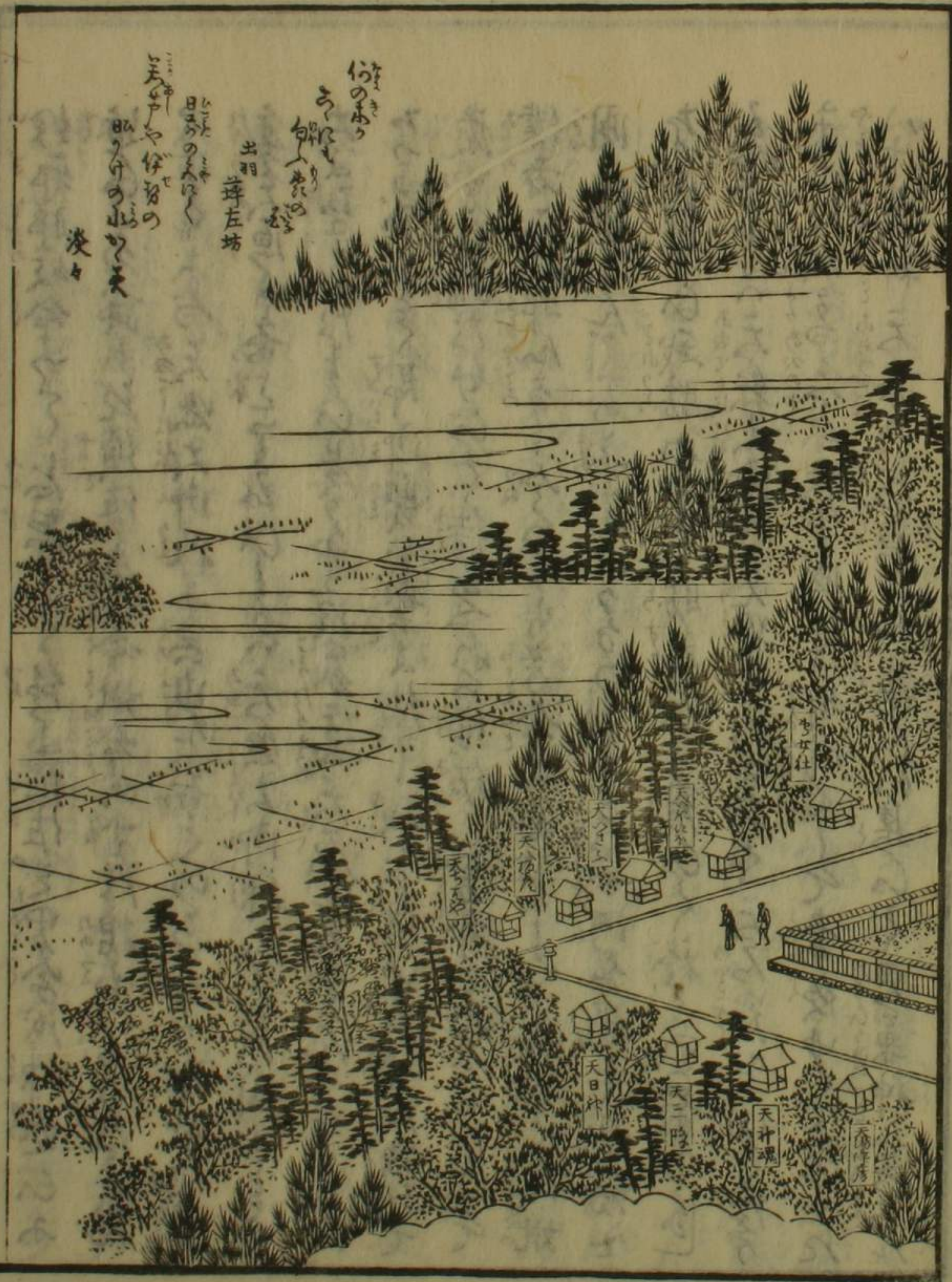
日前宮
國造家

靈光一道此占居
名草宮中雲捧輿
無象明神還有象
日之前似月之初
林道春

伊勢の
神の
眼の
くぬの
木居宣長







編者曰ちまあつての國造家々來の旧化の証に...
...又證考左のおと

而求服人天洋麻羅而料伊斯許理度賣令今作後...
...取天金山之威

石凝姥命に於て八咫の鏡を以て...
...今二箇の所鏡を以て日矛の前所を以て

二種の前御靈を以て...
...二種の前御靈を以て

天道根命の紀國を賜ひ國造と...
...天道根命を以て



水鏡の白
 神代よりついで
 きて鏡のついで
 うつらひの宮
 れなりまは
 一昨日の
 まふつ内裏
 かんま内侍
 所より
 まはる

日影を
 鏡を
 鑄
 圖

室千種三千二神等前驅防衛とありて其三千二神等の内各記の中は天道根命の
見入らざるは既に饒速日神の天降りたるを全事の述べてるを以て其の
書信やまらぬの事なきを彼供奉の神等の名を以て嚴重しくあらせりとの
言ひも目之に明かす。實は皇孫乃天降りたるの供奉の神ならはる古記
はたゞの地とありて其の饒速日尊の供奉の神ならはる古記を以て
彼記の記す所の記す所の記す所の記す所の記す所の記す所の記す所の
又日前宮未社三千座の神は彼供奉三千二神の社を以て皇孫の供奉の神
は是れ其の明證なり。饒速日尊の供奉の神ならはる古記を以て明か
神の神子とも知難く天照大神神の神子孫の供奉の神ならはる古記を以て
論す所の記す所の記す所の記す所の記す所の記す所の記す所の記す所の

兩宮鎮座の事國造家旧記をかんがうる皇孫命天降はし
のちの兩宮の御靈代二種乃神寶共日向國高千穂宮
の齋まつらるる神武天皇東征まつらるる天
道根命よかの二種乃御靈代を托まつらるる
大道根命の事とあるは瓜を以てまつらるる當国名草郡かた
うにまつらるる瓜程は本を以て遷まつらるる
又毛見御遷りて琴浦なる巖のまへに拜まつらるる是
此國の御鎮座の事とありて宗神天皇五十二年豊御

入姫命天照大神神の御靈をまつらるる當国名草濱宮は座
まつらるる付兩大神を以て琴浦より濱宮遷りまつらるる爰に並べ
まつらるるにして三年は五十四年十月天照大神神の吉備國
名方濱宮より移りたまはるるも兩大神は此地に止まつらるる垂
仁天皇十六年今の萬代の宮より鎮座たるひたり此の事
あはるる朝廷より忌部の工に勅命あつて社殿を造りて先
たまふ往古兩宮諸殿式ありこれより朝廷より御修
造絶つてまつらるる中古より鎌倉將軍家をまつらるる武將勅
をまつらるる瓜修宮をまつらるる瓜の結核正美を
はるる境地の封域廣大なる事瓜の事瓜の事瓜の事瓜の事瓜の事
兵弘は荒蕪一尔未小祠をまつらるる瓜寛永四年
國君の眷顧の事再真ありて瓜の事瓜の事瓜の事瓜の事瓜の事
瓜の事瓜の事瓜の事瓜の事瓜の事瓜の事瓜の事瓜の事瓜の事瓜の事

座乃羊鹿瓜等々はくまんとり琴弓のたきびまうませしこと
むろそ六百七十餘年走より濱宮より二十餘年萬代宮遷
座の後千八百四十餘年通計二千五百四十餘年の星霜と後
くともくまへ鎮りまをり神をいの上を人より下百姓に
至るまへく崇敬厚き宮居をうりつめく遷宮ありけり付ハ
大内よりありて神寶をよわらるることありたり
三十萬足室物とてたすくく永仁年中の舊記ありとの餘神室をよわ
こと文徳實録の宣命に次第の大神室の條西宮記北山披今その書に
兩宮神領の國造家舊記を考るに天道根命又當國瓜
たまり瓜神領のくまへく永來ありての舉國のくまへ
三千町を神領瓜瓜く羊中大小の多終百二十餘箇条の
修のををり事あり式部式名草郡を神郡とてくまへ
こ瓜瓜のくまへ其餘神領のくまへ論旨院宣はくまへ六波羅
の神教書室町家乃神教書未數十通國造家乃藏と

ところ嚴然とくまへて天正十二年
神君小牧山陣の市と國造忠雄朝臣ありてを察て
神味方とく家臣の命とく郷民を催しとむごろ乃
僧徒ホ牒しありてすく泉及び出張せしが岡白秀
吉く瓜瓜ゆんご同十二年當國に孔入し根本を
焼亡し國造家累代の右田城瓜瓜ありて社頭瓜
破却し神領瓜瓜没収せしめし忠雄朝臣兩宮乃神
聖代をなすし神室舊記等をよまてく高野山乃
ふりてのぐれ海とくねたせし軍兵退散の後程をく兩
大神をなすしふくび地はくくく
大内記の同記はくく意趣をくくく國造家より瓜田む
惣光寺の同記はくく見えく瓜田城跡乃各く瓜田
かくく秀吉没収の後の神領
國君より寄附したまへり國造家藏は嘉禎年間

神領と他領とのさし証文ありたよ出せり

日前國懸社所遷宮時四面四至糾定郷々支

北	乾	西	坤	南	巽	東	良
他領 神領	他領 神領	他領 神領	他領 神領	他領 神領	他領 神領	他領 神領	他領 神領
六十谷庄道 若鷲カ島	本有本郷 カ称名島	北有本郷ノ道 同シ右本郷	小宅郷 西嶋 西島 大田郷 西島 吉田郷 本島 新島	毛見郷 大崎海 毛見郷 大崎海 毛見郷 大崎海 毛見郷 大崎海	舟尾郷 冷海 冷海 冷海 冷海 冷海 冷海 冷海	湯橋庄 湯橋庄 湯橋庄 湯橋庄 湯橋庄 湯橋庄 湯橋庄 湯橋庄	直川庄上ノ芝原 松島郷 栗栖庄細工谷 永沼郷 西方寺丸島 東頭越 福飯峯筋

右嘉禎元年御遷宮ノ時之四面四至任先例同シ四年九月廿五日依彼糾定令注進之状如件

嘉禎四年戊戌九月廿五日 紀伊國司從五位下源長信

兩宮注右本中仍事之名目大概 他法次者亦畧之

○正月

- 小朝拜 元日 二日 三日 政始 二日巳後七日以前撰吉日 自中古用二日
- 献外杖 上卯日 献破竹 六日 白馬節會 七日 有鉤始上宮者國懸宮也十日
- 御酒水迎 十日 上宮所酒造祭 有鉤始上宮者國懸宮也十日
- 都鎮部所祭 十四日 十五日 踏歌 十五日於草宮前有踏歌
- 鎮所殿 十六日 早且 御鉞山所祭 十六日御鉞山者和佐高山也
- 名草彦所祭 十七日 名草彦所祭 十八日
- 大歳祭 廿八日 下旬撰吉日自中古用 堰祭 下旬撰吉日

草宮荷前

晦日九毎月如此

○二月

朔幣十列

朔日九毎月如此

○三月

大小荷前

三日

御種子下祭

下旬撰吉日

○四月

供齋燭

八日

氏神御祭

上申日

御田方祭

下旬撰吉日

○五月

供昌蒲蓬

四日

供祿

五日

荷前里神樂

十五日九毎月如此

草宮荷前

三日十五日

○本宮祭

晦日

御佐利御祭

上寅日

珠津真奈祭

撰吉日元若三月下旬也

吾自今日至十日夜国造参籠

御田方祭

下旬撰吉日

○六月

五上申

上旬撰吉日自中古定八日

三之方祭

下旬撰吉日自中古用廿五日六日之間

名越之夜

同日

草宮荷前

廿日

奉祭

晦日

○七月

進素餅

七日

日前宮御穗取始御祭

十日

下宮專女御前御祭

十六日下宮八日前宮也專女御前八未社也

草宮荷前

同日

津萬年幾祭

十五日

○八月

草宮田宮土祭

時正撰吉日

八月夜

上中旬撰吉日

草宮荷前

十五日

○九月

一日今日被定臨時祭流鏑馬射手

中言御祭

上旬撰吉日

毛見中言社祭 九日

静火市祭 十五日入夜於草宮
有宵曉之祭

名草姫市祭 十六日

相撲内取 廿五日

後宴 有散赤白拍子勤
其役々廿七日

○十月

一日 又今日奉納幣於兩宮之室藏
次第與六月朔日同

宮奉行渡之祭 廿三日

調庸市祭 下旬撰吉日自中古
定廿六日畢

○十一月

日前宮相嘗祭忌固祭 一日

鳴神社祭 上卯日

氏神祭 上申日如四月

國懸宮市總上御祭 十五日

名草彦市祭 十七日

丹生大明神入所 早且入所草宮十六日

流箔馬 廿六日

○一 序子祭

菴引祭 元者九月也十五日以前撰吉日於
中田浦有此儀

珠津島市祭 元者九月也撰吉日
其次弟如四月

中言社昇祭 廿七日

栗寫祭 同日

伊左祁曾祭

高大明神祭 上酉日元中西日也

相嘗市祭慶盃造祭 三日

慶盃起祭 七日

市麴合祭 十日

黒市酒造 撰吉日

御殿用市祭 十四日

玉殿壯市祭 十六日

大集祭 十八日

○十二月

國懸宮相嘗祭忌固祭 一日

黒市酒造 撰吉日

相嘗市祭 十五日

市解除市祭 相嘗市祭自今日至
十九日四夜之神事畢

小集祭 十八日

同慶盃伏祭 五日

市穗下祭 九日

白市酒造祭 十三日

相嘗市祭 十四日

市解除市祭 十五相嘗市祭自今日
至十八日四夜之神事

小集祭 十七日

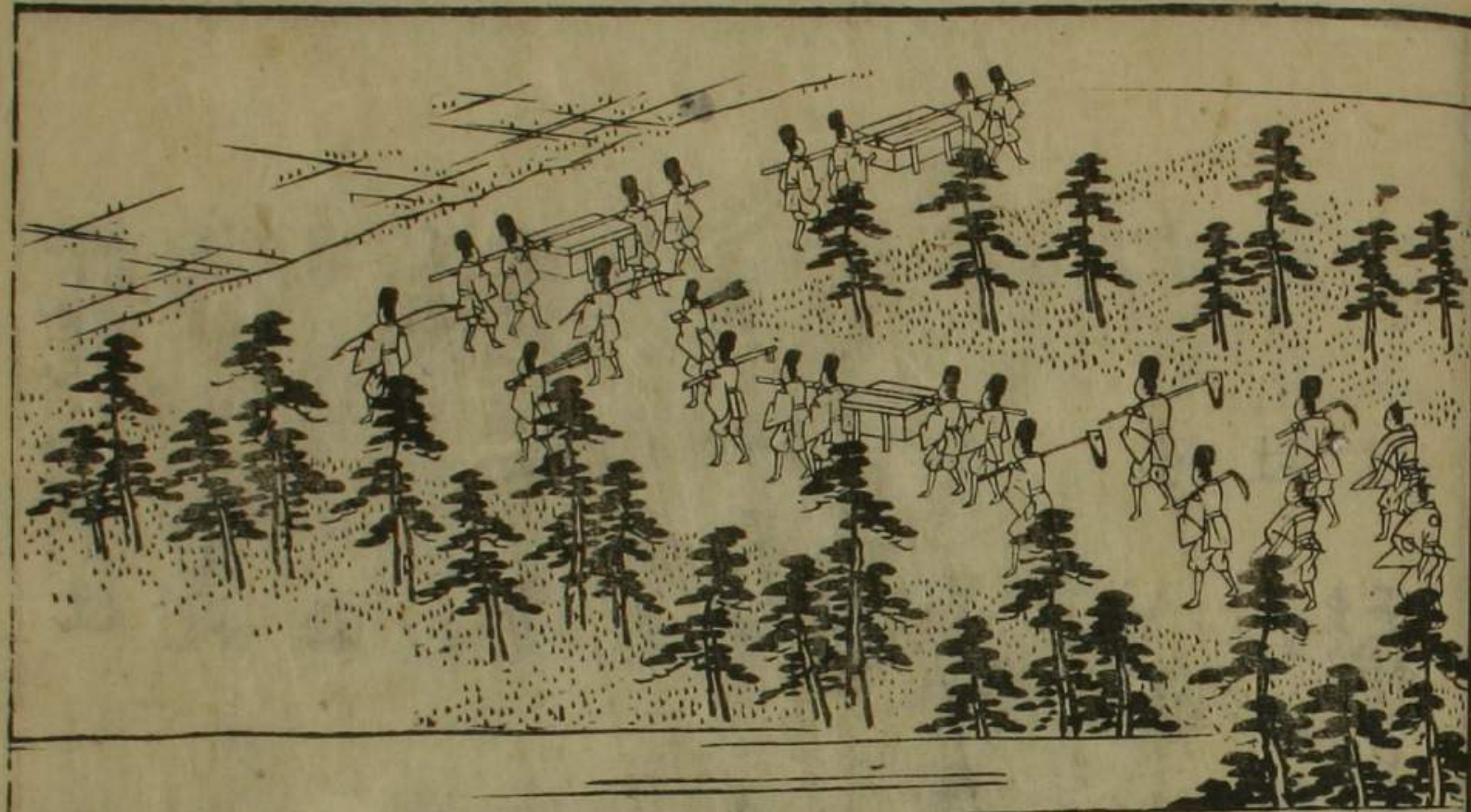
庭立祭

市酒水迎 十二日夜也

市殿用市祭 同日

玉殿壯市祭 十七日

大集祭 十九日



天明五己
九月廿七日
七瀬大後
神幸諸
班列



曰く殿塔の莊嚴きくしち小造營ましく描情光の
額をのびけりりひくくちと宮寺とあり勅願の繪を
たぬりくくはふくは法好くははらり靈驗日にお
らさるりち七十四代鳥羽院上皇然野御幸なりたまひ
し加がきけたりも鷹興とあらりし十君の宮庭とこ
むけとまんのる宮庭わらばとあひしに還都の後薬師
のき像一尊と勅賜たりしなり
そもく十君の天子熾光に感と鳳筆とあらじたまひて
いばまも御帰依ありとあらりしとあらけのまふ
ありは御大皇の冥慮我朝有縁のる像とあらじたま
又出院草創のむしありし法相三論有智のる僧勅を
ましく主勢とあらりしとあらりしとあらりしとあらりし
の中葉以降四海兵刃やじとあらりしとあらりしとあらりし

やそく堂舎のるりも色とまひ終る所伽とる法除もあら
ざりしにたの比我若のる流園道徳え登上人諸國遍山
のほく當ちんりりく通夜ありとあらりしとあらりし
夫慈如弥陀薬師の三佛の奉りしに二尊今念佛乃
法門にま代有縁のるしとあらりしとあらりしとあらりし
念佛の道場とあらりしとあらりしとあらりしとあらりし
つたにたのく大い勸進し廣るをこしとあらりしとあらりし
しよ後して此巨刹とあらりしとあらりしとあらりしとあらりし
淡也家より田園と寄附せられ尚國君のるり代り
御帰依ありとあらりしとあらりしとあらりしとあらりし
○什物茶席画像寄附院 ○秋庭像思茶茶 ○浄土曼陀羅
彩者はるひ ○十六羅漢像幅 寄附院 寄附院 寄附院
秋日吳故薬徳寺底誉上人 中洲

雲棲曾解津梁芳風月徜徉意更高逝矣

丹砂暖日短滿天雨色共蕭騷

忌部里神社 井邊村あり○去人これと本の前より ○祀る神天を玉神

古事記小布刀玉命者忌部首等之祖也 姓氏録右奈

神別小齋部宿禰乃皇產靈子天を玉命の後なり

○又曰玉命率諸部神供奉其職如大上儀云々

首の祖と云る古語拾遺曰天を玉神所率神名曰天日乾命

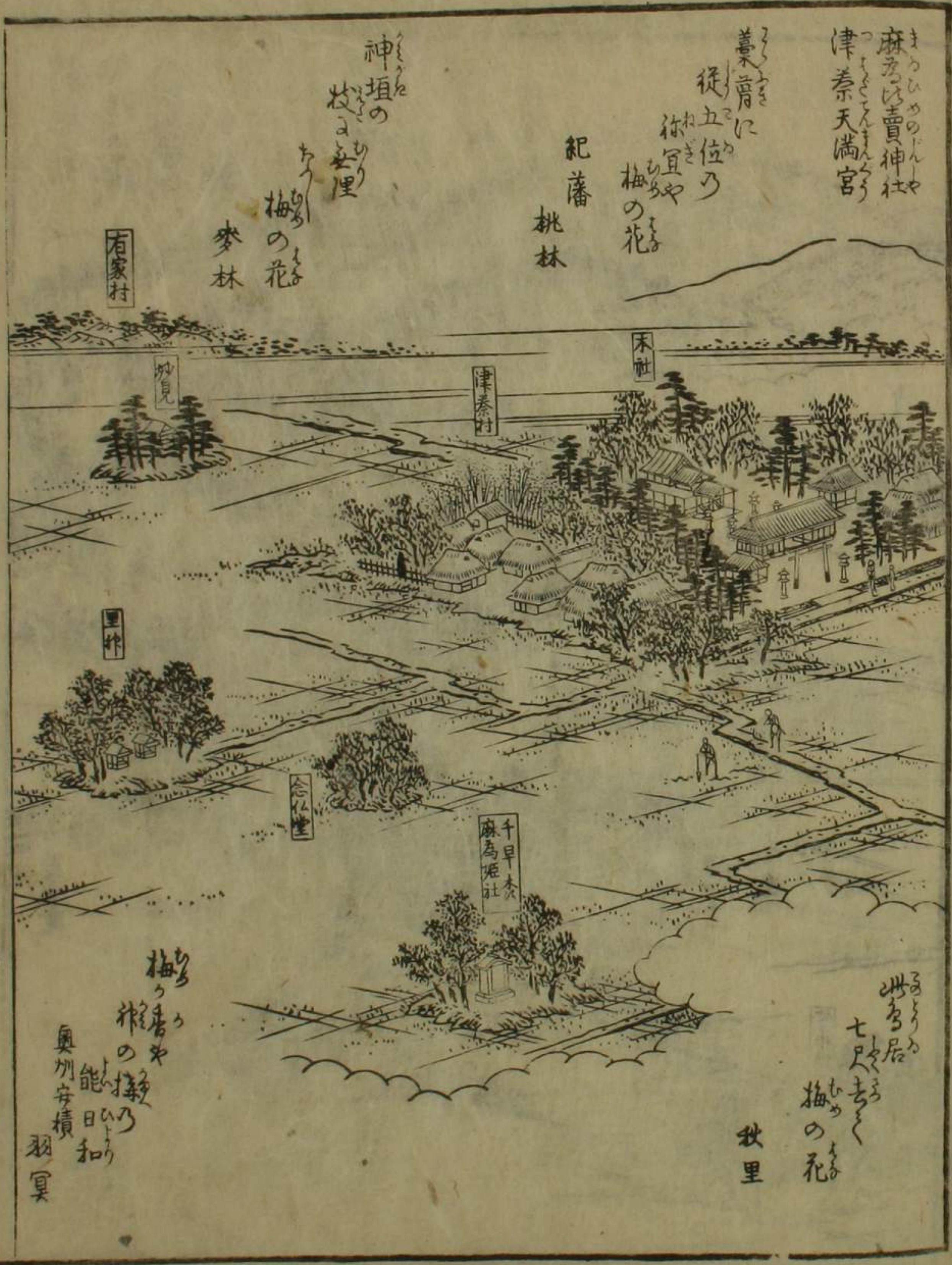
手置帆負命 彦狭志命 櫛明玉命

天目箇命 又曰令玉命率諸部神造

和幣云々又曰玉命率諸部神供奉其職如大上儀云々

其長たる由の姓なりと云まこと玉命と云る日書小玉皇

産靈神男大日命房をりたり延喜式神名帳



たるに難波長柄を承知 孝徳天皇 白雉四年に忌部首作を新
を神官頭 今の祓紙 伯耆 伯耆に新しき一ひし小作加美新が後其職とほぐ
しあつたに心づかして漸く衰微し淳和原朝 天皇 白鳳
十二年天下の万姓とありたありりるゝ八等の位階と定め
あるに既に中臣氏あり二の約ををあらたまふに忌
部氏あり一等と賜しるる此の宿祢とありしありこれ則
廣成が古語拾遺とありりるゝその漸く下りりるゝ
を歎く 所以ありふとて

延喜六年日本紀之竟宴得太王命

物部安興

比佐嘉多行所麻豆流呵美乎伊能留度曾要多母
須惠く亦奴佐波志互氣留

大夜笠持神社

西の津波と云ふ 犯る神手置帆負命

本國神名正一位

○日本書紀神代卷に天津彦火瓊瓊杵乎此言余乃

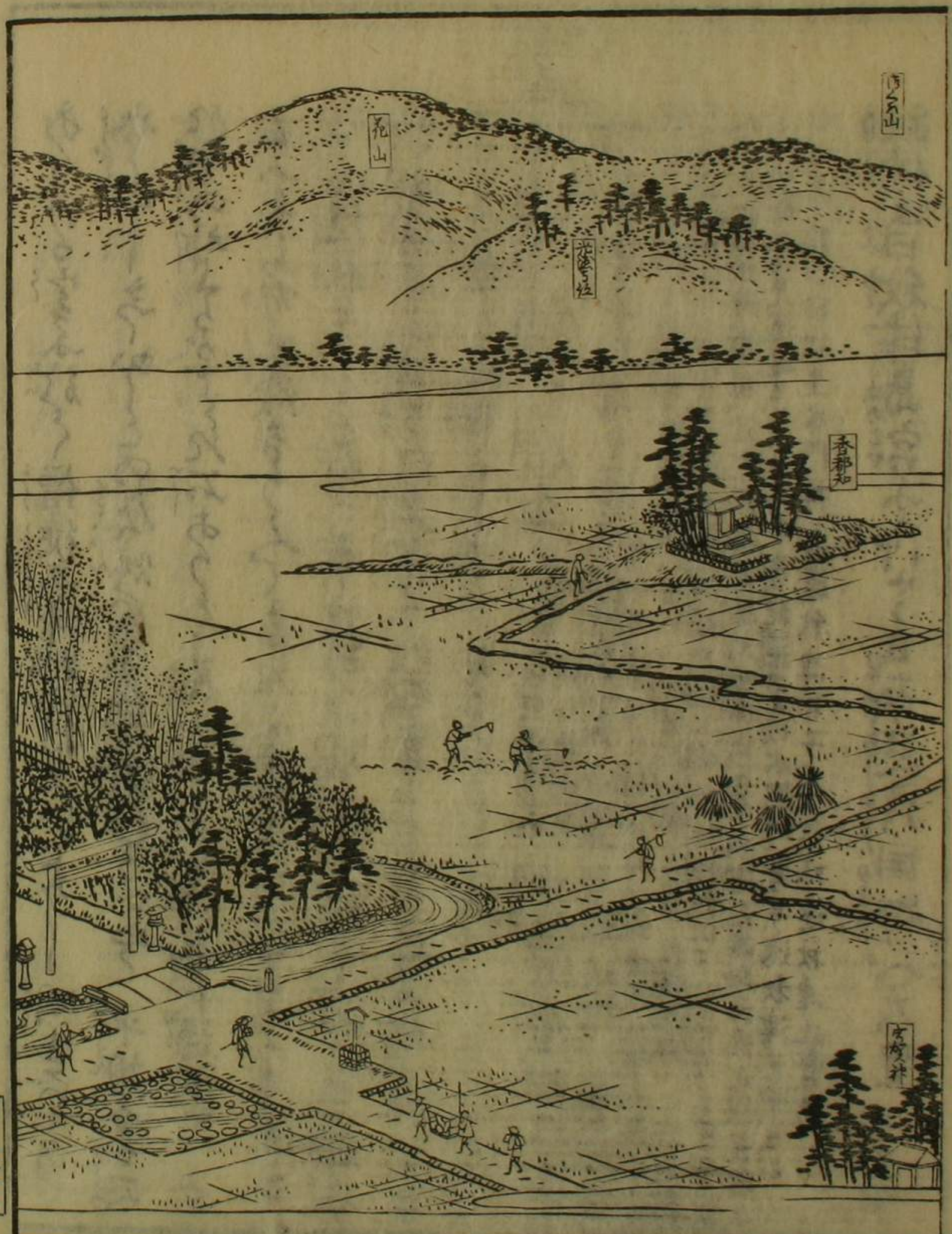
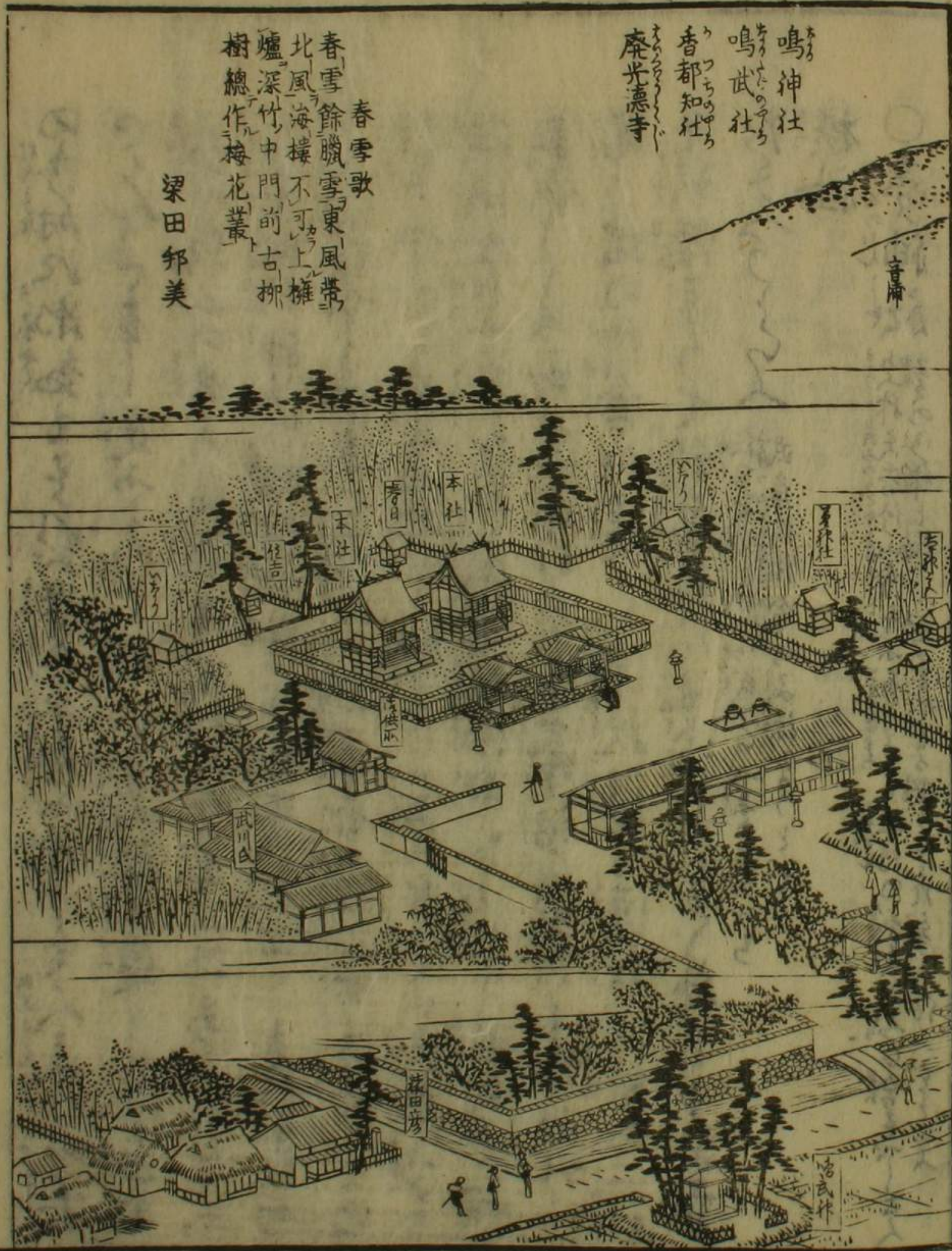
中津國を馭するんがめおとす日向日の穂日高千穂
の峯よ天降りまに段ふ日故経津主神以岐神を御守周
流削平有逆命者所加斬戮順者仍加褒美是時帝順
之首渠者大物主神及事代主神乃合八十萬神於大市
師以昇天陳其誠款之至時高皇產靈尊勅大物主神
汝若以國神為妻吾猶謂汝有疏心故今以吾女之穗津姬
配汝為妻且領八十萬神永為皇孫奉護乃使還降之
即从紀伊國忌部遠祖于置帆負神定為作笠者彦狹
知神為作盾者天月一箇神為作金者天日鷲神為作本綿者櫛
明玉神為作玉者乃使右玉命以弱肩被右手繼而代伊予以糸
此神者始起於此矣且天兒屋命主神事之宗源也故俾以占
之下事而奉仕焉

同書に令天宮令率手置帆負命と云ふは此の神也又
鹿香二師と云ふは此の神也

鳴神社
鳴武社
香都知社
庵光德寺

春季歌
春雪餘臘雪東風帶
北風海樓不可上
柳爐深竹中門前古柳
樹總作梅花叢

梁田邦美



とくたいちり墨崎宮を田とて之脚の畝に灌漑す
して尋常の斗門よあはれ生考を田水攻めも是より
水と引しつりまき尋浦とてつりあしつりて
海濱をりしつりまき尋浦とてつりあしつりて

岡崎御

此地今西○西○小○樹○寺内○門○
岡崎御の御王御成りてつりあしつりて

生魚石

生魚石の御成りてつりあしつりて
生魚石の御成りてつりあしつりて

岡崎御

岡崎御の御成りてつりあしつりて

○當坊の感徳と号

と洛東大谷をわたりて此地に宇治の墓所ありて
先延寶六年和歌山宇治領なる光月寺に
已しあり當園一向門の石碑と建ち推輿に
徒の道骨にうけ納り

弘智王院満願寺

弘智王院満願寺の御成りてつりあしつりて

本尊十一面観世

多善菩薩

多善菩薩の御成りてつりあしつりて

信守菩薩

信守菩薩の御成りてつりあしつりて

社白の推現

社白の推現の御成りてつりあしつりて

藏王推現

藏王推現の御成りてつりあしつりて

○大師堂

大師堂の御成りてつりあしつりて

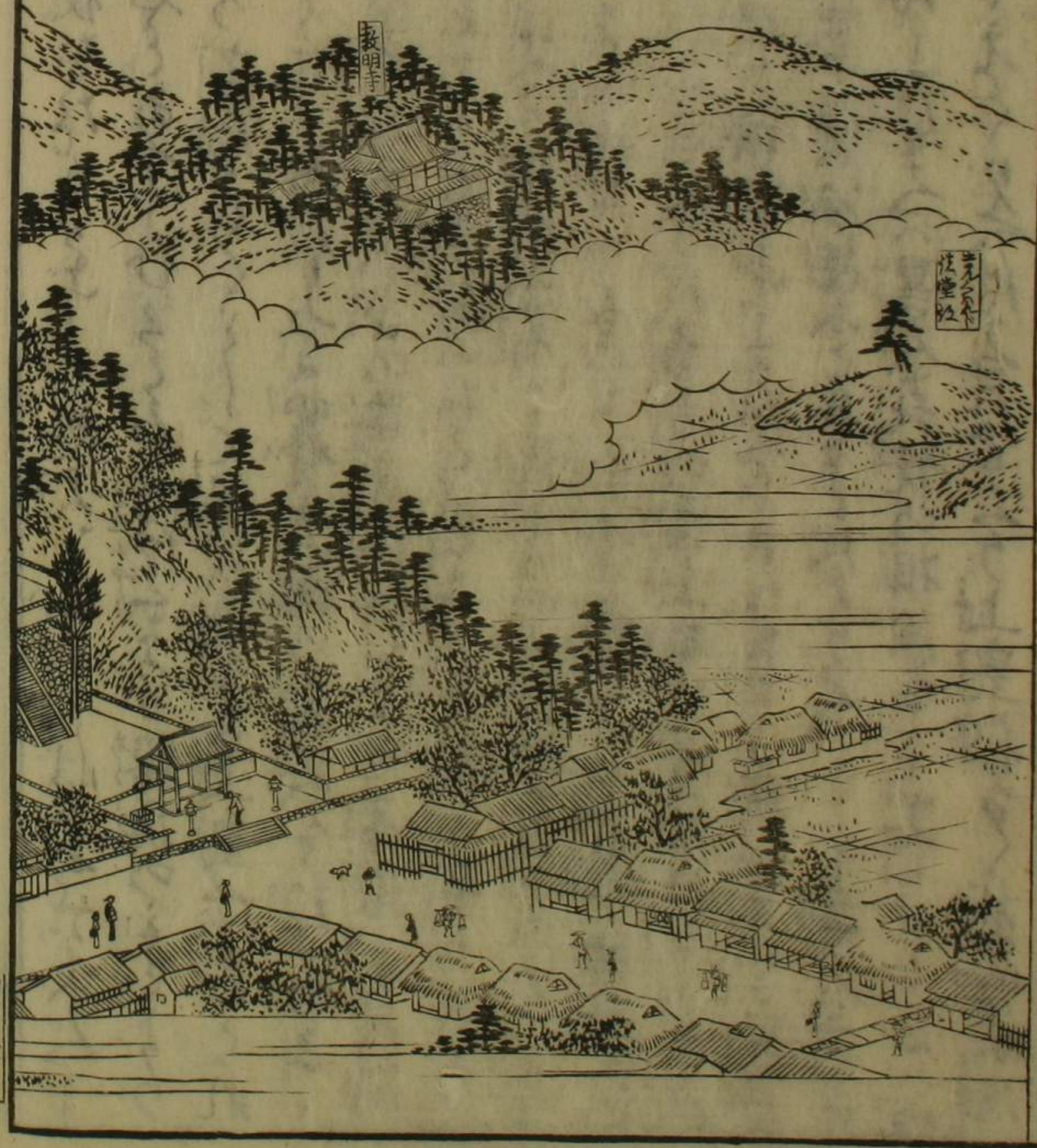
諸國中擬々の比草創たりたまふとつりの聖場たり

其後一條天皇尚ら成りて

満願寺

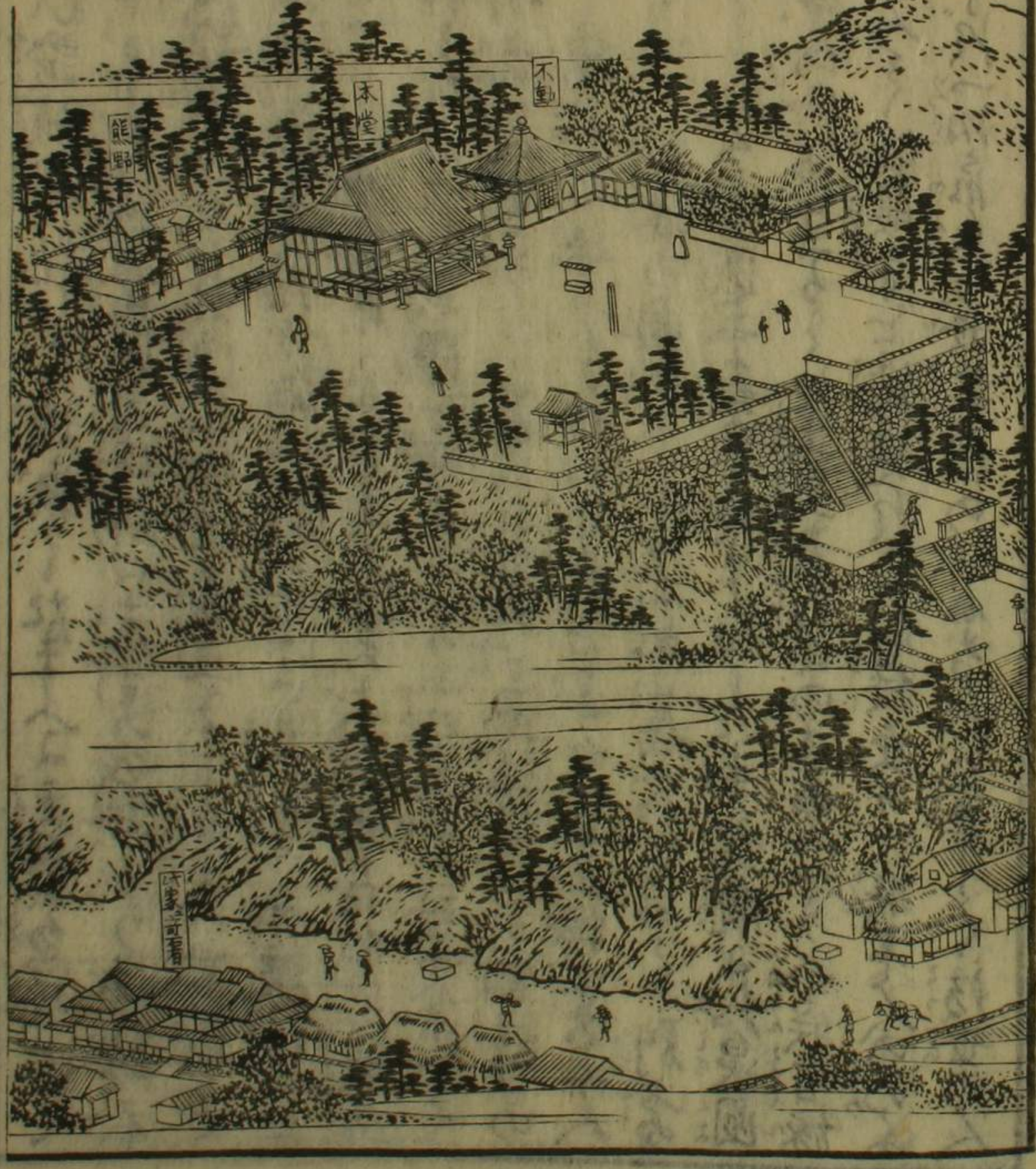
秋郊閑望
一村桑柘暗
千畝稻梁肥
藍水流紅日
白雲住翠微
世途榮願薄
今古賞音稀
尚愧機心在
山禽驚却飛
伊藤長胤

季秋携客
遊満願寺
吟行山寺下
驚見白毫光
香象凌津渡
珠衣拂露相



懸泉窓外落
喬木簷前長
儻數金繩駐
遊人奈夕陽
坂井清洲

満願寺
懷古
法勝靈區倚
翠微寬公謀
國事空非十
年空位長無
恙萬里投荒
獨不歸蛻骨
一簞童子手
鮫珠幾瀉老
僧衣祇今談
合猶留谷精
舍重逢佛日
丹坪



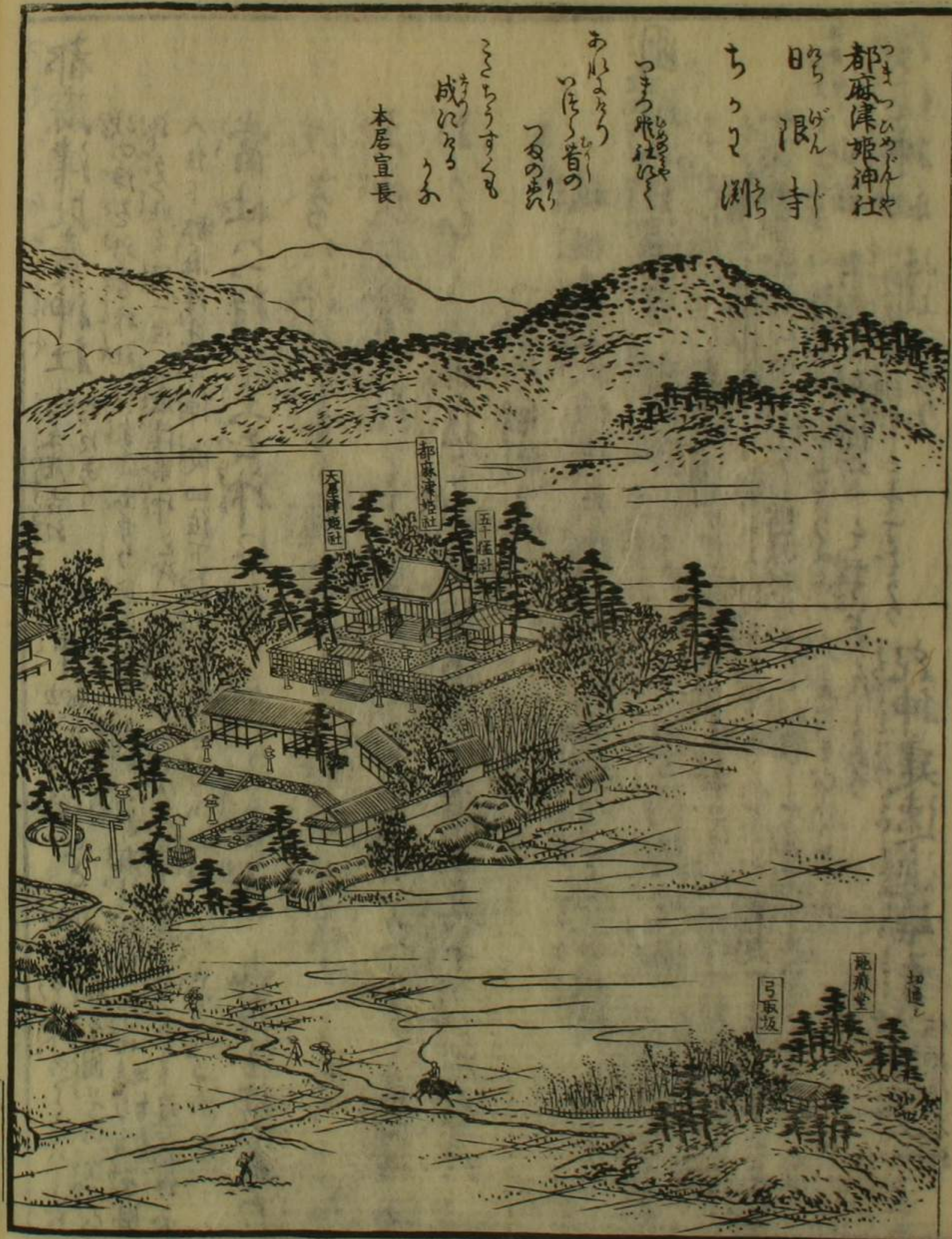
あし證誠殿に於て通夜したまふは天皇忽然として
現にさうり抄當圓岳崎御の末生の心より佛縁不
乏の靈地あるを陳ふゆ盤建立す一ゆふ冥福と
らふ慶大をうんさあふひさまこは地の守護神と
さぶとと神告あさうらうさ上皇隨在のけ洞不
く山をたまふ未禪と四さるふ乃ち右司ふ令下こ
大伽藍と造立しるひ慈母之所推現と勸誘あ
つ鎮守の律々神田寺依と考やうき頼廣上人
もつ中真の因祖一は四郎義家とつ別ある
職かくかく還考をうたまふに車駕既を泉園
の中御あつら上皇た方ふのふやう今朕有縁
ひより満願寺と造建はる保あう朕を人のあふ
あは一切を生二世安樂のあるれい宣く後世の人

とて朕後願のまはきしじやとて震縮の額
此類の天の無火はる震縮の神背像はたかひんふ副たぬ
又焼亡はるる終に還考をうまうさ上皇の中真のたど那
ひそあふのふく其結構彦大をうと七を伽藍具足
し僧坊二十六區にわうらう中葉粒度の火火は焼
亡し十もも存るはもたぬ其むらひの今地名
このゆりぬりて證をよ
○竹室を羽院寺名縮る像 ○月寺を力 ○崇徳院御
震縮 ○涅槃像 ○傳教大師像 ○慈覺大師像
○師幸記は日過滿願寺之間僧等忽喚入每度日前之御幸帶奉此寺先例云々
慈覺大師官相具所誦經物僧等祿之少之由不似先例頗比與也僧慈覺昇此盤
之間退却云々
○東草集は日紀州滿願寺供養文云夫以精舍締稱勝善之衆中佛
閣成死功添供養之莊嚴調高顯如雲構飾讚莫之齋席加之本佛十一
通大誓重開青蓮慈悲之佛眼二四軸莫文新揚白蓮譬喻之名
題乃至負和三年丁亥二月十八日

寂々古祠中
一望塵慮空
夏天不知暑
倚杖聽松風
相江山人

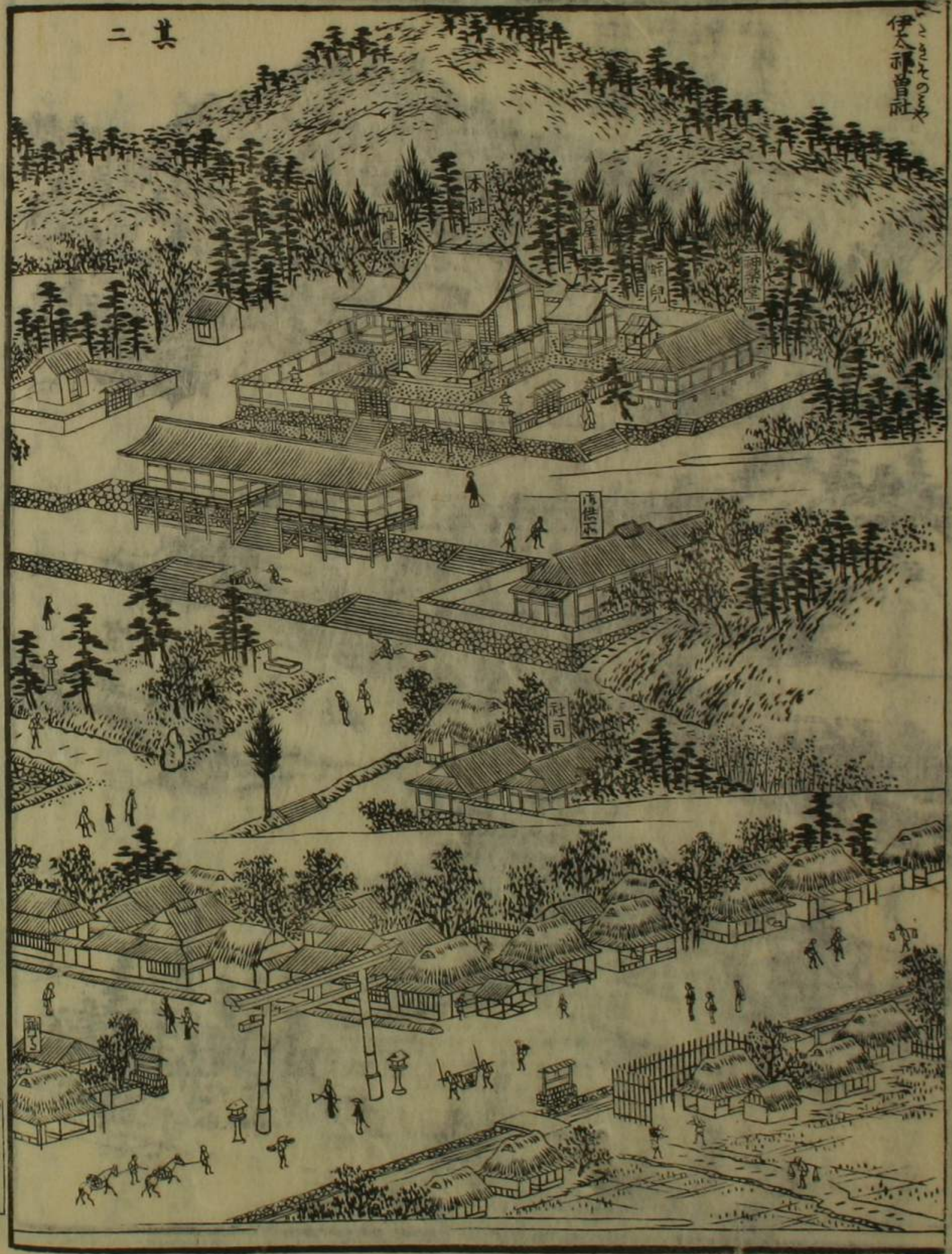


都麻津姫神社
昭限寺
ちりこ淵
あはれなる
つらさ首の
つらさの
まじらうすも
成のなる
うみ
本居宣長



當社の神使座 甚もく久遠に々々年歴未詳ありに殊
 更真廃ありたゞあて近々の天の兵丸もさく灰塔
 旧記の考へるものありとあり今僅く小初に成してその
 旧跡をさしりてさるも此地の領佐 河内守の進の
まづの千速破荒振 まづの千速破荒振 まづの千速破荒振
まづの千速破荒振 まづの千速破荒振 まづの千速破荒振
 名抄は名草郡の領佐神がの名とありまづ上代より最も
 ある宮名に々々毎年の祭祀ありも最重たることありけん
 といふ今式 延喜式 延喜式 延喜式
延喜式 延喜式 延喜式
 神名帳と写す 延喜式 延喜式 延喜式
延喜式 延喜式 延喜式
 これを除き 延喜式 延喜式 延喜式
延喜式 延喜式 延喜式
 奈久智の王子社 奈久智の王子社 奈久智の王子社
奈久智の王子社 奈久智の王子社 奈久智の王子社
 凌遠路と道泰ナクチ王子とく 凌遠路と道泰ナクチ王子とく
凌遠路と道泰ナクチ王子とく 凌遠路と道泰ナクチ王子とく
 とありあり

大聖心遍照院普門寺 大聖心遍照院普門寺
大聖心遍照院普門寺 大聖心遍照院普門寺
 本寺十一面觀世音 本寺十一面觀世音
本寺十一面觀世音 本寺十一面觀世音
 大師堂 大師堂
大師堂 大師堂
 鎮守祠 鎮守祠
鎮守祠 鎮守祠
 伊弉册神社 伊弉册神社
伊弉册神社 伊弉册神社
 山乘菰の生土神 山乘菰の生土神
山乘菰の生土神 山乘菰の生土神
 田村傳法院の寺内 田村傳法院の寺内
田村傳法院の寺内 田村傳法院の寺内
 啓行神柳女 啓行神柳女
啓行神柳女 啓行神柳女







山松多露
 滴林下擢
 秋空幽跡
 元難實清
 香却不輕
 餐非黃菊落
 採豈紫芝榮
 坐遇人相贈
 塵寰慰此生
 明霞
 若山
 茂立
 女連
 直狩
 水山

志々傳法院と号したまふ是實に崇徳天皇保延六年
 の事と云ふ此當山乃靈區と云ふやめる佛因のありの事あり
 たりと云ふ當郷伊太祈曾大神の奥の院とて供僧の輩
 あり酒髪にして當村に住し毎年神輿の渡御いも厳重と云ふ
 神佛一如のこころありあらば尤も仰の氣色跡まじかり
 たりと云ふ諸堂巍然として一方の大巨刹ありとて天正十三年
 三月根來寺の火と共に灰燼に今僅に其遺址存するること
 丹生神社 明王寺村にありまうらうと丹生律姫神あり伊太祈曾神の
 天宮 日村にあり土人雨の宮と云ふ
 丹生神社 本國神名帳に云天手カ男神
 足守明神祠 日村上野山觀音寺の境内にあり土人云う伊太祈曾神社に諸國
 里俗のたの故と云ふあるかきやうの事と云ふ世にまこと多しと云ふ也
 斯詞備の備乃音便の美と云ふは書記の一書に有物若草牙生於空
 中因此化神號天常立尊可美草牙彦男尊と云ふ事草牙彦男尊を共思
 四六十八

